＜前回＞オリエンテージョン＋昨年度の講義のまとめ

０．オリエンテーション	4/11
１．「解放の神学」系とは何か	4/18
２．拡張された自然神学と社会科学	4/25
３．解放の神学と宗教社会主義論	5/9
４．フェミニスト神学	5/16
５．黒人神学	5/23
６．アジアの解放の神学	5/30
７．アフリカ神学の動向	6/6
８．政治神学の現在	6/13
９．宗教的寛容論	6/20
10．民主主義とキリスト教	6/27
11．戦争論と平和論	7/4
12．経済の神学	7/11
13．経済と環境	7/18
14．経済と政治	（7/25）
15．フィードバック	

＜授業の概要・目的＞
＜成績評価＞レポートによる。
＜受講の注意事項＞
・質問は、オフィスアワー（火３・木３）を利用するか、メール（授業にて、指示）で行うこと。
＜導入・昨年度講義から＞
「現代日本における宗教哲学の構築をめざして」（キリスト教学専修『キリスト教学研究室紀要』５号、2017年3月）
一　はじめに
・・・
　おそらく、現代の思想状況において宗教哲学が困難な理由については、次の三つの観点を区別しつつ、論じることが必要であろう。すなわち、宗教に関わる理由、哲学をめぐる理由、そして宗教哲学として宗教と哲学の結びつきに関連した理由である。
・・・
　以上が、現代において、そして現代日本において、宗教哲学の構築が困難であることの理由の一端であるが、しかし現在、知的世界の状況は、さらなる転換を予感させてはいないだろうか――いわゆるポスト近代の思想状況である[(6)]――。この予感が正しいとすれば、宗教哲学の貧困な時代にも、なおも新しい可能性が見出しうるかもしれない。これが、現代日本において宗教哲学の構築をめざす根拠にほかならない。しかし、この課題を遂行するには多くの思索を積み重ねる必要があり、それは本論文の範囲を遙かに超えるテーマとなる。
・・・

二　宗教哲学の広がりとその輪郭

西洋哲学の古代から現代までの長い歴史において、そもそも宗教哲学とは何であったのか。過去の宗教哲学を振り返ることは、今後構築が期待される宗教哲学について、その輪郭を描く際の基礎的な作業となる。

まず、宗教哲学について、広義と狭義の二つの意味を区別するところから議論を始めよう。というのも、宗教哲学は、一方では「宗教の哲学」の総体という意味で、つまり、宗教に関わる哲学的思惟のすべてを包括するものとして解釈できるが、しかし他方、キリスト教神学から独立した哲学的思索という歴史的により限定された意味においても解釈可能であって――この二つの解釈はそれぞれ根拠を有する――、この二つの理解は相互に区別する必要があるからである。

・・・

このプラトンの議論は、キリスト教的自然神学（＝宗教哲学）の源泉と解すべきものであって、このように、宗教哲学は哲学の誕生の時点にまで遡り、その後の哲学史の展開過程の中で、さまざまな思索を生み出してきたのである。しかし同時に、宗教哲学はより限定的な意味で使用することができる。先に述べた、キリスト教神学から独立した哲学的思索という歴史的に限定された意味における宗教哲学であり、「吾々は、宗教哲学が学問として成り立った始めを、カントに置くことを適当と考える」という西谷啓治（「宗教哲学――研究入門」）の議論が示す通りである。(13)

・・・

以上の広義と狭義の区別にもかかわらず、これら二つの宗教哲学理解には、そこに共通するものとして、宗教哲学と人間論との関わりが指摘されねばならない。すでに見たように、波多野は、古代ギリシャ哲学における宗教の主題化（＝広義の宗教哲学の成立）を、人間の生（人生）に対する自覚的な取り組みと結びつけていた。また、狭義の宗教哲学の発端と言えるカントの特徴を、パネンベルクは「人間学的転回」として、つまり哲学的思惟の中心が人間に移った点に見いだしている。(15)これらの議論が妥当なものであるとすれば、広義と狭義の宗教哲学とは、哲学的思惟における自覚的な人間論（哲学的人間学）に関係づけられると解することができるであろう。プラトンにおける広義の宗教哲学の人間学が形而上学的であったのに対して、狭義の宗教哲学の人間学は、伝統的な形而上学に対するカントの批判を経たものなのである。

(16) いずれにせよ、宗教哲学の基盤が人間学と関わることは今後の考察にとって、重要なポイントとなるであろう。

次に、以上の広義と狭義の宗教哲学の議論を、宗教哲学の普遍性と特殊性の問題へ展開してみたい。

・・・

本格的な議論を行うには、「普遍性」についての考察を深めることが必要になるが、ここでは、普遍性の議論に具体性を付与するには、いったん特殊性の議論を経由することが有益である点に注目することにしよう。(18)

・・・

このことを念頭におくならば、近代以降の宗教哲学に関しては、ドイツ語圏と並立する仕方で、たとえば、英語圏、フランス語圏、そして日本語圏などにおける宗教哲学の特質・

動向を分析することも有意義な作業となるのではないだろうか――本論文が課題とする「現代日本における宗教哲学の構築」のためには――。

こうした観点から興味深いのは、英語圏の宗教哲学である。英語圏の思想的伝統としては、近代初頭からの理神論と自然神学、あるいは経験論、分析哲学、プラグマティズムといった諸思想を挙げることが可能であるが、これらは、英語圏の宗教哲学にさまざまに反映されている。たとえば、ジョン・ヒックの『宗教の哲学』はその典型例と言えるであろう（19）――それは英語圏における宗教哲学の優れた教科書である――。

・・・

英語圏の宗教哲学は、伝統的なキリスト教思想と緊密な関連性において存立し、そこにおいてまさに自然神学は哲学と神学の媒介項（「と」）として機能しており、宗教哲学は、しばしば哲学的神学と重なり合っている。（21）

三　宗教哲学の基礎をめぐって

四　展望

・・・

この近代的モデルが未だ支配的であるとはいえ、20 世紀を通じて、時代の動向は、いわゆる「ポスト近代」という状況へと確実に動きつつあることも否定できない。

・・・

啓蒙的な一元論的な公共理解から多元性の適切な理解に立った公共論（齋藤純一『公共性』岩波書店、2000 年）への転換を促し、それは「宗教と文化」の二元論に対して「多元的な宗教文化」論へと向かう宗教理論（土屋博『宗教文化論の地平――日本社会におけるキリスト教の可能性』北海道大学出版会、2013 年）の構築を求めている。以上が、現代の宗教理解を方向付ける動きであって、現代日本において宗教哲学の構築しようとする試みにはこの動向との積極的関わりを模索することが求められると言わねばならない。そのために参照されるべき思想家としてモルトマンとハーバーマスが位置づけられるのである。

・・・

このように、モルトマン神学の展開の中に、近代的知と宗教との対立（宗教批判）そして宗教多元性という現代の思想状況に対するキリスト教神学の側からの積極的な取り組みを確認することができる。しかし、近代的知と宗教との対立を乗り越えるには、神学の側からの動きだけでは不十分であり、近代的知の立場、たとえば哲学の側からの動きが必要となる。その点で、興味深いのは、21 世紀に入ってからのユルゲン・ハーバーマスの動向である。（35）

・・・

現代の宗教哲学を構想する場合に、モルトマンとハーバーマスにおいて確認できる知的状況の変化は重要な意味をもつように思われる。それは、「有神論対無神論」、「キリスト教対マルクス主義」といった対立図式はもはやその妥当性を大幅に喪失しつつあるということであり、さらに「宗教対科学」、「キリスト教対仏教」といった従来の議論の構図についても、見直しを要求するものとなるかもしれない。現代の思想状況から展望できる一つの方向性は、対話・コミュニケーションにおける「多元性と合意」（多元的公共性）の具体化であり、その理論的な掘り下げには哲学的な思索が不可欠である。ここに現代における宗教哲学が取り組むべき課題が存在するのではないだろうか。

１．「解放の神学」系とは何か

１．1980 年代以降のキリスト教思想の動向：宗教的多元性と科学技術

「現代キリスト教思想は多岐にわたっており一見混沌とした様相を呈しているものの、この動向（特に 1980 年代以降）を詳細に分析するとき、次の二つの中心問題を確認することができる。

１．キリスト教と科学技術（自然科学が担う近代的合理性と技術的革新）との関わり

２．多元的社会におけるキリスト教の課題・意義（公正・正義に対するキリスト教の寄与）

現代のキリスト教思想をリードする思想家たちは、それぞれの思想的立場は異なるにもかかわらず、ほとんど例外なく、これらの問題を意識しつつ思索を進めている。これら二つの問題は相互に無関係に位置づけ得るものではなく、むしろ緊密な結びつきにおいて考察されねばならないことが、国内と海外を問わず、研究者の共通認識となりつつある。現代の科学技術の問題が社会的正義の問いと無関係であり得ないことは、環境と経済が分離不可能な問題群を構成していることからも、明らかである。

特に、３・１１の東日本大震災と原発事故以来、原子力発電に象徴される科学技術の問題状況は、それまでのキリスト教思想の楽観的な論調に大きな修正を迫っている。また、リーマン・ショック以来、キリスト教思想にとって、経済はこれまで以上に重大なテーマと意識されている。」（科研申請書から。http://agape009.blog.fc2.com/）

２．森田雄三郎「現代神学の動向」（1987 年）、森田雄三郎『現代神学はどこへ行くか』（教文館、2005年）

「今日、欧米を訪れるとき、その地の神学的雰囲気が、かつての弁証法神学全盛の時代とは大きく変化していることを、だれしも実感するであろう。しかも、その新しい雰囲気の中で中心となる本質的なものは、まだ必ずしも定かではない。バルトやブルトマン、あるいはティリッヒやニーバーといったいわゆる大物が存在せず、まさに神学の戦国時代に突入した感がある」、「このような動向が表面化しはじめたのは六〇年代半ばであった。この新しい動向の深まりと激化は、さまざまな神学的主張と教会批判の実践とともに進展したが、その本質はいったい何であったのか。一九六五年から今日まで既に二二年が経過している。この一世代に近い年数の間に、新しい動向はそれぞれの立場の自己主張に学問的な自己検討を加え、神学的方法論をも明確に反省してきたので、新しい動向を漸く全体として総覧できる時期が来たと言えよう。」（32-33）

解釈学としての神学／歴史の神学（宗教学・宗教史の神学、科学論の神学）／希望の神学・革新の神学（解放の神学）／プロセス神学

３．1960 ～ 70 年代：弁証法神学の担い手の逝去

バルト（-1968）、ブルトマン（-1976）、ティリッヒ（-1965）、ブルンナー（-1966）、ゴーガルテン（-1967）、R・ニーバー（-1971）、H・R・ニーバー（-1962）

４．新しい問題の顕在化：

1970 年代以降（アメリカでは 1960 年代から、日本では 1980 年代から）、生命倫理と環

境倫理がキリスト教思想でも重要なテーマとして意識されるようになる。
→　科学技術の問題の再テーマ化（対立・分離を経て）。
宗教的多元性が神学的問い（宗教の神学）としてテーマ化。

５．これらの諸テーマを議論する枠組みの不在。それぞれの視点、文脈から、理論的かつ実践的な多様な試みが並行して発生した＝混沌。
この思想状況の基調は現在も継続中＝現代神学２
・背後にある現代世界の激動
1970 年前後：1968 年・学生の反乱、1971 年・金ドル交換停止（ブレトンウッズ体制の終焉）
1990 年代：東西冷戦の終結と新自由主義の台頭
21 世紀：アラブの春以降、リーマンショック
↓
「グローバル化／多元化」という状況
・新自由主義に象徴される新しい資本主義（知識資本主義）
・「帝国」とは何か。国民国家の相対化・覇権の多元化の中で。
「グローバル化／多元化」の中で何が生じているか。グローバル化は多元化を促進する。
・危機＝問題の共有・相互連関
・議論の場の多元化
生命／環境、経済、リスク
・情報が基本的カテゴリーとして登場
情報としての生命、貨幣の電子化（物としての貨幣の終焉？）、
情報・資本主義
・政治（国民国家）と経済（グローバル市場）の新しい連結の模索
いよいよ現実のものとして顕在化する。国民国家の危機は、真のポスト近代の幕開けか
↓
この状況で、キリスト教、神学は、どこに立つのか。国際化？　どんな国際化？

６．「現代神学の冒険――新しい海図を求めて」（『福音と世界』2016.10 ～）
（一）連載の構想の提示
第１回（今回）:「冒険への招待」。連載「現代神学の冒険――新しい海図を求めて」の意図・目標を説明。連載のおおまかな流れ（構想）の提示。
第２回 :「現代神学の前半：一九二〇年代～一九六〇年代」
第３回 :「現代神学の後半：一九七〇年代～二〇一〇年代」
現代神学の動向は、「近代／現代」という時代と密接に相関している。したがって、新しい神学動向の理解には、その背後にある前史（思想史など）のまとめが必要であり、本連載では、二回分を使って、現代キリスト教思想史を概観し、神学的課題をできるかぎり明確にする。
（二）現代神学の基本問題（海図の素描あるいは骨子）

「拡張された自然神学」に基づいて、現代神学の基本な諸問題の連関を描く（主に、聖書から社会科学への道筋を軸に）。

第４回：インターリュード１

第５回：聖書学と神学方法の問題（現代神学の方法と聖書。聖書から社会教説へ）

第６回：現代神学における政治というテーマ（政治神学と政治哲学・政治思想）。現代政治思想の諸動向（アガンベン、ジジェク、ネグリなど）とキリスト教神学との関係性に留意しつつ。

第７回：現代神学における経済というテーマ（経済の神学）。近代経済学、新自由主義を超えて。

第８回：エコロジーの神学の可能性（マクフェイグと環境神学、プロセス神学の動向）。政治と経済の競合・緊張に留意しつつ。

第９回：インターリュード２

（三）現代神学の争点（海図のディテイルを書き込む）

第 10 回：解放の神学の再構築。あるいは解放の神学は終わらない。二十一世紀に入り、アジアの解放の神学（民衆神学など）が再度議論を活性化させつつある。

第 11 回：キリスト教と社会主義。キリスト教神学の社会思想を、多元化とグローバル化の力学の中で描く。自由主義と共同体主義との論争との対比も問題になる。

第 12 回：フェミニスト神学の展開。環境論へ（エコ・フェミニスト神学）、そして欧米を越えて（アジアのフェミニスト神学など）。この連関で、「性」をめぐる諸問題を追加することも考えられる。

第 13 回：黒人神学の最近の動向とアメリカの宗教状況

第 14 回：アフリカとキリスト教の可能性。キリスト教との関連において、この一〇〇年間の間にもっとも劇的な変貌を遂げたアフリカから、キリスト教思想を考える。

第 15 回：インターリュード３

第 16 回：宗教の神学・宗教間対話

第 17 回：宗教的寛容論

第 18 回：戦争と平和

（四）科学技術の新しい動向に対応して、あるいは「科学技術の神学」をめざして

現代世界の主要な規定要因とも言える科学技術は、現代神学においてもっとも集中的な議論がなされつつある問題領域であり、その全体は「人類文明とキリスト教思想」とまとめられるであろう。これを論じることは、「拡張された自然神学」の中心課題の一つである。

第 19 回：生命科学とキリスト教思想

第 20 回：環境科学とキリスト教思想

第 21 回：脳科学とキリスト教思想

第 22 回：原子力とキリスト教思想

（五）キリスト教神学の理論的深化に向けて、あるいは現代神学の行方

第 23 回：神学の学的基盤を刷新する

第 24 回：「神学と哲学」という古く新しい問い

７.「解放の神学」系：現代神学・現代キリスト教思想の諸動向の内において共有された主要な問題系。

1)救済と解放：個人（魂・内面）と共同体（政治・経済・環境）
　近代的自己・個人・人格という視点における人間の救済は、狭く、抽象的か？
　人間の全体性の関わりおける救済という視点
2)問題の広がり：ラテン・アメリカの解放の神学
　女性・人種・人権の問題領域へ
　アジア・アフリカへ
　他宗教へ
3)時間軸：展開／停滞／再構築

・「解放の神学」：アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ
賀川豊彦、M.M.トーマス、民衆神学、ピエリス、栗林輝夫
アフリカの解放の神学、南アフリカの黒人神学、アフリカの女性神学、文化内開花の神学

・Atancey M. Foyd-Thomas and Anthony B. Pinn（eds.),
Liberation Theologies in the United States. An Introduction,
New York University Press, 2010.

Acknowledgments

1 Black Theology（Anthony Pinn）
2 Womanist Theology（Atacey M. Floyd-Thomas）
3 Latina Theology（Nancy Pineda-Madrid）
4 Hispanic/Latino(a) Theology（Benjamin Valentin）
5 Asian American Theology（Andrew Sung Park）
6 Asian American Feminist Theology（Grace Ji-Sun Kim）
7 Native Feminist Theology（Andrea Smith）
8 American Indian Theology（George（Tink）Tinker）
9 Gay and Lesbian Theology（Robert E. Shore-Goss）
10 Feminist Theology（Mary McClintock Fulkerson）

About the Contributors
Index

・Forword the the Second Edtion（Chritopher Rowland）:
　it assumes that, without Marxism, liberation theology would have any rationale. This veiw is widespread. ... What such views fail to recognise, however, is that liberation theology ahs never been greatly indebted to Marxism, even if in vertain important respects ..., it has some parallels to it. ... If liberation theology had stayed as it was in the period before 1990, such criticism would be

justified. It has not, and a new generation of liberation theology has continued with the essential features of the liberation theology method, albeit in changed circumstances.（xiii）

＜参考文献＞

１．栗林輝夫『現代神学の最前線――「バルト以後」の半世紀を読む』
新教出版社、2004年。

２．ヴァージニア・ファベリア、R.S.スギルタラージャ編『〈第三世界〉神学事典』
日本キリスト教団出版局、2007年（原著、2000年）

３．Christopher Rowland, *The Camridge Companion to Liberation Theology*,
Cambridge University Press.　First edition: 1999、Second edition: 2007。

４．Stacey M. Floyd-Thomas and Anthony B. Pinn（eds.）,
Liberation Theologies in the United States. Introduction,
New York Univeristy Press, 2010.